

景観保存におけるポリティクスの審美化

ジェームス・S・ダンカン*,
ナンシー・G・ダンカン**
(北條 大成*** 訳)

James S. Duncan and Nancy G. Duncan
Aestheticization of the Politics of Landscape Preservation
Annals of the Association of American Geographers, 91(2), 2001, p.387-409

本論はアメリカ郊外のコミュニティにおける、排除にまつわるポリティクスの審美化を吟味するものである。研究にあたって、調査の焦点は、景観、社会的アイデンティティ、排除、そしてベッドフォード住民の審美的態度、ニューヨークの諸関係に絞る。階級間の関係は審美化を通じて神秘化され、ライフスタイルや消費パターン、趣味志向や視覚的な好みの問題にすり替えられている。景観は、エリートたちの社会的アイデンティティの機能において、積極的な役割を担うようになった。ベッドフォードのような場所の美観が保存され高められることによって、社会的分化が生み出され、維持されているのである。場所の審美は、住宅地の厳しいゾーニングと、多くの未開発の土地を自然保護の名の下に“守る”ことによって為されている。本論は、ロマン的イデオロギー、ローカリズム、反都市主義、反近代主義、また彼らの持つ“野性的”自然という階級に基づいた美意識の構造、それらの役割を探求する。本稿の主張は、ベッドフォードのような場所が、ローカリズムや自然美の称賛、そして自然保護によって審美化と階級意識の問題の相互関係を隠蔽している一方では、ニューヨークのメトロポリタン地区において居住地不足の問題が発生しているということである。景観の審美的評価における一見イノセントな楽しみや自然保護への欲求は、社会的排除やエリート階級意識の再確認のための、捉え難くもきわめて効果的なメカニズムとなっている。

キーワード：審美的環境、ポリティクスの審美化、ベッドフォード、ニューヨーク、エリート景観、自然保護、社会的排除、社会的アイデンティティ、郊外

景観は、場所の可視的・物質的な一面として、強力な印象と感情を喚起できる。それはコミュニティの価値の構成を扶助し、場所に基づく社会的アイデンティティと分化 (Lowenthal 1991; Cosgrove 1993; Daniels 1993; Graham 1994; Rose 1995;

Matless 1998) の中で、中心的役割を演ずる。コミュニティのメンバーの一部は、他者を除外あるいは抹殺すると同時にアイデンティティを呑み込む景観づくりのための、経済・文化資本 (Bourdieu 1984) を集めることができる。景観は、場所の特殊なアウ

* ケンブリッジ大学
** ケンブリッジ大学
*** 法政大学大学院生

ラ＝一回性 (Benjamin 1969) で満たされた、わずかな地位財 (Hirsch 1976) をもたらす。財産とアイデンティティが直結するアメリカのような資本主義社会では、美意識が、非政治化された階級関係 (Harvey 1989) 上の重要な役割を担っている。権力、権威、生産活動によって構成される階級関係が、審美化されるのである。これにより、階級関係は隠蔽され、ライフスタイルや趣味、消費パターン、また視覚・感覚的あるいは珍しさの称賛というカテゴリに組み込まれる。階級と権力との関係は、美意識とライフスタイルの選択に矮小化される。景観は、それをコントロールできるだけの富と権力を持つ者たちの財産となる。景観は、エリートたちの社会的アイデンティティの機能と、社会生活やコミュニティ内の価値構成において、社会的行動の背景として積極的な役割を担う。

地理学者・社会学者の一部は、景観の審美が重要な地位財であることに理解を示してきた (Firey 1945; Lowenthal and Prince 1965; Duncan 1973, 1999; Pratt 1981; Hugill 1986, 1989; Wyckoff 1990; Lowenthal 1991; Ley 1993, 1995; Higley 1995) が、本稿は、それを文化資本の一形態として捉えることがより重要であると主張する。なぜなら景観の趣味は、社会の何にも増して富豪を夢中にさせることでありながら、学問上は取るに足らないものと軽視され、ほとんど研究されずにいた問題だからである。しかし、それを議論することの重要性はかつてより高まっている。

グローバルな都市の産物である裕福な郊外は、現代社会の多くの場所で見られる現象、すなわち近代的大衆社会における非人格性やグローバル化がもたらす心理的不安—社会関係が抽象的な社会・経済関係による複雑で巨大なネットワークの中で急速に剥奪され断絶されていくという (Giddens 1991; Beck, Giddens, and Lash 1994)—からの審美的避難の、際立った好例である。Harvey (1989, 292) が言うように、「基礎的な制度 (家族やコミュニティ) の再生、また歴史的根元の探求はすべて、もっと確かな拠り所、移りゆく世界の中で継続性のある価値を探求しようとする徴候である」。この反動は、急進的かつ戦闘的なローカリズム (Probyn 1990)、地域主義、エスノナショナリズム、もしくは Harvey (1989, 305)

の言う「審美化された空間性による反動的ポリティクス」に顕著である。それは場所の称賛として現れ、しばしば評されている以上に広範囲かつ巧妙なものになっている。公共的関係の未発達を隠蔽し、近隣関係の「記号価値」を称賛する、コミュニティの審美が、そこにはあると言える。またそこには、グローバルネットワークからの切断という幻想と、場所への再埋込 re-embeddedness とを結び付ける反近代の審美もある。

本論では、NYC から北へ 40 マイルに位置するベッドフォード (図 1) の景観の役割に注目し、社会的分化について検討する。ベッドフォードは、居住者が自らの街の美観を保存・向上させることで社会的地位を確立している、郊外の審美的風習の焦点といえる現場である。彼らは厳しいゾーニングと環境保護政策を通じて、さらには自然保護の名の下に可能な限り未開発の土地を保存することによって、それを果たすのである。本稿では、それらの保護の中で、野性的自然の構築に政治的様相を付与する、ロマン的イデオロギー、ローカリズム、反都市主義、反近代主義、そして階級に基づく審美といったもののすべてに、焦点を当てる。そして、自然環境の称賛や、ローカル景観に要求されるユニークさが、審美とアイデンティティの相互関係性や社会的公正から目をそらしてしまうことを示したい。

ベッドフォードの自然景観の審美的評価における、自然保護への欲求、その一見無垢な志向には、複雑な文化史・政治史があり、ここではその一部に触れることしかできない。しかし、審美的産物としての景観が、捉え難くそれでいてきわめて効果的な排除の装置であることは示さなくてはならない。ベッドフォードに住み働くことのできる多くの人々は、貴重でユニークな“場所の感覚”を保存したいという欲求に支えられた、様々な社会・経済・政治・法的慣習によって、制約されている。これがベッドフォードに限った話であれば、さして重要な社会的影響のある問題ではないだろう。しかし、NYC 郊外の街の多くが、すべてではないにせよ、同様の排除と審美的慣習の特徴を有しているのである。その慣習とは、潜在的には手頃な家屋を開発し得る居住可能地区を、減らす影響力を持った金持ちが、受けている恩恵のことである。

ベッドフォードとその周辺住民の社会・経済的な横断面における、200件以上の、徹底的に構造化されたインタビューおよび半構造化されたそれは、古い住民から最近の移住者までを対象に、幅広く行った。時間は一人につき30分～6時間。また、街の様々な公的機関や、不動産業者にも質疑を行った。質問の焦点は、ベッドフォード周辺において人々が何を尊重しているか、彼らが街のどのような変化に気づいているか、なぜベッドフォードに住もうと思ったのか、国土開発と環境保護についてどのように考えるか、ベッドフォードのゾーニング計画がどのような影響をもたらすと考えるか、という問題に絞った。また、景観同様、住民たちが無思慮かつ無批判に政治的中立のものとして読んでいる、地方史・計画文書・不動産広告・新聞等の分析も行った。

本論の目的は、ヘゲモニーの働きと、エリート階級に利する審美的言説の役割を吟味することである。地理学のフィールドにおける揺らぎは、構造決定論修正の必要から、構造／構造化や安定化、意図されぬ外部性よりもむしろ個人の活動や自治体、計画に向けられるようになってきているが、それでは、ヘゲモニーの働きと構造的不平等に対する批判的に足らぬ分析から注意を逸らすことになってしまう。地理学者たちの間で、敵対関係の暴露や、あらゆる紛争地域におけるヘゲモニーの脆弱性を明らかに出すことに強い関心がある間は、ヘゲモニーの程度とそれに対する抵抗の成功は、未解決の経験的な問題であると言えよう。ベッドフォードのような場所では抵抗が分散的かつ極小であり、支配と現状維持を志向する巧妙な事業は、関係者自身が自らそれと気づかないほどに曖昧である。我々は、クリティカルな地理学者、現状維持に利害関係を持たない部外者として、住民が見過ごしがちな相互関係と構造的条件（歴史的言説を含む）に着目したい。

関係者すべて—受益者、社会的重大性に影響を与える者、学問上の遠近法から観察する者—によってなされるような、さりげない日常的な権力の動員を認識させなくする問題の細分化は避けなくてはならない。研究対象内の自然化されたカテゴリは、我々自身の正当化のために用いるよりもむしろ、再政治化すべきである。Mitchell (1996) が記述したような、ベッドフォードやカリフォルニアのサン・ヨアヒ

ム・バレーの緩やかな緑の丘の美しい景観に向けられる審美的態度を、社会的公正の問題や複雑さを遠ざける危険性から切り離して考えてはならない。そうした景観の美しさは、それを生み出すための搾取 (Daniels 1989) や排除を隠蔽し得る。この意味において、審美的態度は批判的態度と対立し得るのである。審美は無批判あるいは非政治化されたものと定義したが、付言しておくべきこととして、一部の芸術 (景観や様々な演芸を含む) は、その慎重な批評性や抵抗の力において、例外である。

特定階級のメンバーが利益を受けることに対して批判的であるかないかにかかわらず、日々の意志決定における幅広い枠組みに疑問を投げかける者は少ない。居住機会に影響を与えるような、現存する多くの局地的な政治組織は、潜在的に異議申し立てをし得る住民たちの空間的分散によって、稀に注目されるのみである。かつてベッドフォードの景観を創造し、現在それを維持している堅苦しい政治の慣習は、漫然と、かつ空間的に囲い込まれている (これでようやく街の独自性が保たれている)。たとえば、アメリカの町の中に土地を所有しない者は、排除的慣例に抗するために法廷に立つことができない²⁾。こうした、排除に対する潜在的抵抗の範囲外にある構造は、とりわけベッドフォードのような圧倒的な住宅都市においては、街の相対的な自主性と住民の権力のために生じる。Soja (1989, 6) が指摘するように、「いかなる空間が社会的重大性 consequences を隠蔽するために創られ、いかなる権力と規制の関係が一見イノセントな社会生活の空間性の中に彫り込まれ、いかなる人文地理学がポリティクスとイデオロギーに満ちていくのかを、追求しなければならない」のである。

いかなるヘゲモニー的思想が再生産されているのかについての、バランスの取れた見地を見出さなければならない。高度な自意識、計画性、戦略化を認知すべきであり、安易なごまかしには与えず、場所の代わりに原初的階級の再生産を探索しなくてはならない。Eagleton (1990, 4) 同様、本稿も「18世紀のブルジョワジーがクラレット片手にテーブルの周りに集まって彼らの政治的ジレンマへの解決として審美の概念を思いつくなどと言う気はない」のである。本稿の観点は、Willis (1977, 2) 初期における、

「階級的アイデンティティは、実際には、それが厳密に個人と集団を通過するまで、すなわち個人と集団の意志決定に現れるコンテキストの中で再構成されるまで、再生産されなかった」という記述に遡ることができる。人々のシニカルな発言も興味深い、むしろ彼らが信じていることの方に、より関心を置くべきである。同様に、法を通じた戦略や弾圧よりも、日々のイデオロギイ的慣習や、自明のものと捉えられている支配の状況と関係を助長する思想に対し、さらなる注意を払いたい。前者は排除の総合的理解において重要であるが、手がけられるべき困難な仕事は、感情にアクセントを置くベッドフォードのような場所において、場所や文化遺産、自然、場所アイデンティティへの愛着が発展し慣習される過程を学ぶことである。疎外（文化的抑圧）や、ロカリティへの愛着と称賛による意想外の社会的重大性を認知することへの消極性にこそ、注目しなくてはならない。

興味深いのは、景観が社会・政治的に欠かせないものとなっていく過程、またそれらがどのように過去・現在の社会関係 (Duncan 1990; Mitchell 1996) を具体化しているかである。いかにして景観が社会的アイデンティティの機能において中心的になっているかを理解するため、また、景観を生み出しそれに浸されながら暮らす人々が、意識の上であるいは実質的に（言葉にされないレベルで）景観をどのように捉えられているかを調査するために、解釈学的アプローチを採用したい。とりわけ留意すべきは、様々な解釈 (Duncan 1990; Duncan & Duncan 1997) によって流動する社会・政治的重要性である。こうした特殊なケースの研究における最も理論的で興味深いことは、潜在的抵抗の分裂と空間的構造化を通じて成し遂げられたヘゲモニーの成功である。景観の全体的な構造は、最富裕層を除くすべての人々の物質的な変更・修正能力を超えて、安定的である。しかし一部のコミュニティでは、住民が景観を操作することができる。地域的・物質的基礎とともに、景観は、私用、排除、私的（団体も含む）所有、ローカル法の様々なメカニズムを通じて私物化される。権力関係と排除は景観デザインを通じて審美化され、意義申し立てを受ける領域に踏み込まずにいる。それにより排除は、反民主的と気

づかれるどころか、希少価値のアウラを獲得し、文化資本の様相を呈する。“排除”“締め出し”というネガティブな言葉が、“高級”という言葉に置き換えられる。高級な隣人は、地位の高い人気者である。

景観は、社会的アイデンティティの誇示に欠かせないものであると言える。集合的記憶、コミュニティの物語、発明された伝統、共有された環境への配慮が、継続され、演じられ、時に競われ、またある時には文化遺産として固定される。Harvey (1996, 8) が言うように、「我々は、その明白な高級さがわからないのは愚かだとされるような、物体、制度、言説、さらにはそうした相関的な機能・権力の性質とに取り囲まれた、日常的慣習の中にいる」のである。景観は文化資本（地位財）に変形させられ、社会的アイデンティティの伝染は排除を通じて行われる。社会・経済・政治・法的な各種の慣習は、景観と社会的アイデンティティに対する特殊な欲求の結合を創造・安定化するために考案されてきた。排除はそれと見なされておらず、代わりに保護と定義されている。以下で説明するように、目的とされているのは、社会的排除自体ではなく、“景観の見た目”を保護することなのである。排除されているのは、一部の人々ではなく、目障りな住居の増加なのだ。

コミュニティの中で最上流階級に上りつめ、より意のままに土地を私有化できるようになった者は、居住空間を拡げたいと考えるようになる。最下層の隣人たちが自分の室内すら意のままにならない中で、である。より巨大な富を得ることで、人は室内をコントロールし始め、やがて家の周囲を所有しようとする。さらに巨額の富を費やすことで、金持ちは、審美的に好ましい住居や土地の、個人的なチョイスを誇示することができる。ベッドフォードのような街で最高の金持ちは、最高の資源と最高の称号を併せ持っており、遠方まで眺望を拡げるための操作を望み安全圏を拡げようとはするが、そのとき自身の景観に障害物がないことを好み、魅力のないものは見えなくしたいと思っている。彼らが土地から得る喜びは、コミュニティ全体の審美・空間的慣習をコントロールすることの価値でもある。ベッドフォードやその類似都市の住民は、土地を所有することによって、視覚的演出、もしくは Lefebvre (1991) が言うところのユニークな“作品”として、都市景観を

創出する権利・義務が与えられると信じている。“ユニークな場所の感覚”は、隠蔽された排除、均質化および“空間的浄化”(Sibley 1995, 72-89) などの曖昧な慣習を支えるべく、はっきりとした目的を規定する。

アイデンティティに対する我々の見解は、場所に対するものと似ている。それが流動的で、演ぜられ、細分化された、複合的で、競われたもの (Butler 1990) であるにも拘らず、人々は継続的にアイデンティティを確立・安定化しようとし、場所に礎を下ろそうとする。Pratt (1998, 27) が場所の安定性に関して主張したように、「境界の否定は、それに捕われていない者のみに許された贅沢」である。本稿はここに、境界がないことに脅かされない者、あるいは境界によって排除されている者のみに、と付け加えたい。Pratt はさらに「同じことが、彼らのロマン化にもそのままあてはまる」と述べる。言い換えれば、安定したアイデンティティと、境界を設けられた場所は—それが積極的であろうとなかろうと／守られていようと捕われていようと／能力であろうと強制であろうと—常にではないがしばしば、不安定性と浸透性を称賛する昨今の学理的な偏愛に抗する、経験的リアリティとなる。我々は Harvey (1996,8) の次の言葉に同意する。

「変動と流動が、存在論的な優先順位を与えられるべきものと理解されていることは認める。しかし、我々を取り囲む境界が、団結を助けるとともに生命の意味をも与えているその“機能”にも、さらなる注意を向けるべきであることを強調しておきたい」

Pratt (1998, 44) の議論にあるように、場所が「階層化された差異の格子」ではなく境界を持たないぼやけた混沌と見られるならば、我々地理学者は、崩壊させるべき「境界構造の多様な過程」を理解することができなくなる。ベッドフォードは、今日合衆国で打ち立てられるアイデンティティにおいて、境界構造の投企と再領域化により、さらに安定的で平穏な連続体の終点に向かっていく場所である。従って我々は、曖昧で気付かれにくい、自然化され審美化された社会・空間的境界を強化する態度に、焦点を当てる。

社会関係の審美化

対象の審美化が意味するものは何か？ 様々な差異があるにも拘わらず緩やかに結び付けられた審美的言説は、啓蒙時代から、慣習の中で融合されてきた (Eagleton 1990)。浸透し続ける審美の性質に対する、現在最も一般的な見地は、それを審美的態度の芸術・自然など実在物への直接的で無思慮な反応の領域、と仮定するものである。最も自然化された無意識的な期間を除けば、相対的に無思慮になることで、審美は認知科学の分野から切り離される。この意味において、審美的位置づけは、物事それ自体の実質性を採択する無思慮で直接的で、自然化された喜びのイデオロギーに結びつけられる。審美的喜びは、しばしば教育的趣味あるいは“洗練された”鑑賞に基づいているが、学習過程の一部は、“心の習慣”という性向が自ら証明している通り、趣味の内面化である。そうして審美は、他者と共有すべき、客観的ではなく主観的だが自明な、自発的な協調を引き出す、感覚・肉体的喜びや反応の即時性³⁾へと結びつけられる。Eagleton (1990, 28) は以下のように述べている。

「審美はその始まりから、相反する両極の概念を内包している。一方には純粋な解放の力を持つ。変則的な法よりも感覚的衝動や仲間意識に関わり、社会的調和の安全装置となる。そしてもう一方では、政治的ヘゲモニーにより大きい力を与える、Horkheimer が言うところの“内面化された抑圧”を示している」

審美的態度は、ぼんやりした一般化以上のバロリゼーション (Pepper 1986; Lash and Urry 1994, 49)、中央集権的な支配を超えたロカリティのバロリゼーション、さらにはグローバルな相互関係性⁴⁾の認知に優る場所への埋め込み、Massey (1993) の言う「場所の革新的な感覚」をもたらすような、ヨーロッパのロマンチズムに、緊密に結びつけられている。景観への批判的態度に抗する審美的態度を採択することは、それを肉体的に快いものと同様の自然で自治的で自明のものと思なすという意味で、景観から疎外されることとなる。Williams ([1960] 1988, 1990) に倣い Harvey (1996) は、場所に基づく例外主義は、直接のローカルな経験に直接的には

近づけないような、より空間的に広範囲な進行を伴うため、非審美的には調和させることができないと信じている。彼の見解は、Massey (1991) のそれよりも慎重で悲観的だ。Harvey (1996, 32-33) は、「空間を跨いで」存する、「潜在的に革新的」で「実態的」な「情緒的で親しみやすいコミュニティで結成される連帯」について希望的に語っていたときでさえ、「闘争的例外主義 militant particularisms」のような反動を怖れていた。大規模で無批判な、場所への審美的反応が自然化された例外主義を見るにつけ、我々は、非審美的・解放的で政治的革新性につながり得る場所への愛着について述べた Massey (1991, 1993) はおろか、Harvey 以上に悲観的にならざるを得ない⁵⁾。審美主義とロマンチズムはむしろ、「個人的、国家的、民族的特異性の追求」(Pepper 1986, 71) を内的に検証するためのものとして見たい。

審美は自発的で、自然化されたものであり、文化資本の形態をとる趣味の「洗練」への信仰とも矛盾しない。Bourdieu (1984, 36) がフランス中産階級における審美的広範な研究から認めたように、趣味は主に、階級・文化的習俗における因習的な経験を通じて、世代を超える影響力がある家族のコンテキストから学習される。そしてそれは、大いなる自由と個人的表現の闘技場として逆動的に現出する。Bourdieu (1984, 56) は「すべての趣味は自然なものと思われている。ほとんどはその通りだと言ってもいいが、多くの他者を不自然な墮落したものとして拒絶する習性をも有している」と述べた。上品な社会的差異は、示威的な審美的礼賛に基づいている。こうした態度は比較的短い期間に計画的に学習され得るのだが、最小限の自意識と上品に表される審美的感性は、生涯をかけて学習するものとされている。たとえばベッドフォードでは、ほとんどの人々が景観の趣味についての歴史や文献的基礎を知らないのだが、彼らは無頓着で経験的な方法でそれを学んでいるから、知る必要がないのである。彼らの審美的趣味は、芸術と生活の間のギャップを埋める、すなわち生活と景観を独自のアウラを放つ作品 (Campbell 1987, 183, 199) へと変えるための、一般的な生活態度として演ぜられ、継続されている。

趣味は、個人が自らに表題を付すべく財産として

見られるようになってきた。これは自律的な個人という理想に基づく、コミュニティの感覚を生み出した。この見地から、審美はヘゲモニーと同じ質のものであると言える。何が魅力的かという問いには、論理的な議論や厳密な分析など不要であると信じられている。そうした判断は、倫理、イデオロギー、政治、ヘゲモニーの効果の維持 (Eagleton 1990) などからは切り離された、審美の領域から生まれるものと思われている。感覚的で熱烈な、うわべだけ自治的な、内的に課された法以外には従わない個人の主観的な経験を通じて、ヘゲモニーは自発的な賛意によって獲得される。その上、政治や倫理、認識や理性の領域とは異なり、それ自体で完結した審美的支配は最も安定的なヘゲモニーである。

カントが審美的判断を不文律と定義したことは (Eagleton 1990) 、階級を超えるコンセンサスや共謀が強制なしに達成される状態を指した Gramsci (1991) によるヘゲモニーの概念に一致している。ヘゲモニーは、すべての階級に利すると見せかけて上流階級のみに利益をもたらす、疎外の思想に基づいている。ヘゲモニーの論理は露骨でなく、意識の中の嘘のように微妙なものだが、それらは広範に推進し続けられる。しかし、ヘゲモニーの脆弱さと断片化、そしてきまぐれな皮相性、また、支配的な概念が責任を問われることのないまま開かれた経験的な問題と見なされている点は、認めなければならない。Eagleton (1990, 20; 強調ママ) は言う。

「中産階級による究極の拘束力は、習慣であり、信心であり、感傷と感情である。それは「審美化」される権力であると言って良い。身体の自発的な衝動であり、感受性と情熱の絡み合った、無思慮な慣例である。今日、権力は、主観的経験による些細な事柄と記述されている。法律を習慣へと分解し無思慮な慣例へと変えることが人を幸福にするとされており、それに背くのは重大な自己冒涇とされている」

Bourdieu (1984) が言うように、ある慣習は、「魔力」を持った、あるいは審美化されたもの—自然化され、当たり前のもと見なされ、しかし目には見えず、「学理的」ではなく現実的な問題—となる。通常、審美的態度は非分析的で—社会的関係や生産・再生産の状態の裏に潜むものを批判せず、表層的で一、感覚的になりがちである。但し、分析や批評が、そ

れ自身で完結した純粋な喜びとなっているような例もある。その場合、人は批評における審美（望む望まないに拘わらずこれに気づく大学人は少ない）について語り出す。

もちろん、ある事柄に対して、実際的なスタンスと“同じように”審美的な態度を採択することは可能である。審美的な反応は、しばしば二次的であるものの、時間的あるいは空間的に、どうにか隠退させられているのである。審美—絵画のような景観—は、それ自体で権利を有する価値があると見られており、その他の過程（経済・政治・社会的）に存在する相互依存は、しばしば神秘化されている。審美が鋭敏さである限り、それは認識やモラルから切り離されているように見なされる。また審美が明確には表現できないものである限り、誰もそれがポリティクスにつながるものと判らないし、まして景観を楽しむことの中にある政治的な含み (Rose 1993) について語るなど思いも寄らない。例えば職場の階層におけるポリティクス、人種のポリティクス、おかまのポリティクス等、審美化やロマン化によって（良くも悪くも）神秘化され得るあらゆるポリティクスを見ることは、困難ではない。環境を取り巻く西洋のポリティクス、エスノ・ナショナリストのポリティクスやその他の例—ロマンチズム、自然の絵画的な美と崇高さへの審美的な評価と熟視の長い歴史、そして土地への深く感情的な愛着の両方に基づく—が、いかに定義によって実質的に審美化されロマン化されているかを見るのは、さらに容易である。にも拘わらず、そうした歴史の原典の根拠は政治的闘争に没頭することで不透明なものとなり、また、審美的評価の問題は一般に個人的で自発的で非イデオロギー的なものとして見られる。

審美的価値はときに、他の問題に抗する積極的な価値としてのローカルな意思決定作用とみなされるが、その相互依存性は十分に評価されていない。審美とその他の目的、例えば社会的公正や安全、経済的發展、利便等との間のトレードオフが認知されているとしても、審美それ自身がイデオロギー的、即ち無意識に一定層の支配を助ける階級・民族的基礎であると認められることは、稀である。言い換えれば、我々がここで議論するのは、ポリティクスの審美化が存在するということである。

場所としてのベッドフォード

ベッドフォードとその歴史について簡潔に述べ、その後、自然のアートとしての居住景観創造におけるポリティクスが、どのように排除の過程と結びついているかという議論に戻りたい。ベッドフォードは、ニューヨーク州北ウエストチェスター郡に位置する、人口1万9,000人の裕福な街である（図2）。その田園風景や緑豊かな景観は、地元民や近隣住民に賞賛されている。ベッドフォードは、社会的アイデンティティ、また、趣味の良さや文化財、伝統、栄誉、環境保護の名の下で語られる地主的な生活様式への審美的希求が際立った土地柄である。精力的に守られた排除空間は、Lefebvre (1991) が官僚化（ここでのゾーニング法や環境法）と商品化（土地購入や奉仕の任から得られる権利への強い期待）によって生み出される視覚的抽象と呼んだものに一致する。

ベッドフォードで特筆されるのは、なだらかにうねる丘と開けた牧草地（図3）、そして保護の行き届いた歴史的町並み（図4）であろう。楓と樅の高木が、乾いた石の小山に沿った無舗装道路に覆い被さっている（図5）。大きい石や白い羽目板の大邸宅が、しばしば道の高木に隠されている。街の開発やゾーニング会議のメンバー、ローカル新聞、17政治団体によって最近組織された連合は、上述のような景観の保護に対する支配的な関係を共有している。そうした組織の間で、とくに都市計画・ゾーニング会議は、法によって、健康や安全、福利厚生等の問題に反する審美に重きを置き、残りの団体は、功利主義上の視覚的喜びにおける古典的・ロマン的選択 (Campbell 1987, 195) 内の審美に焦点をあてている。

森林地帯への回顧と言っても、ベッドフォードの場合、開けた牧草地は森林や河川、低湿地、湖沼、丘陵から切り離されている。ベッドフォードには三つの小村ときわめて小規模な軽工業があるが、そのほとんどは住宅地である。広い敷地はベッドフォードでは当たり前で、50エーカー超はざら、中には100エーカーを超える物件もある。同時に、細分化された物件もわずかながら現存するが、たいてい10エーカーを下ることはない。細分化されない土地こ

そ高級で価値があると考えられる傾向もある。ベッドフォードが初めてだが—これこそベッドフォードの特徴と言える—広大な保有地は、細分化された土地よりも、手つかずの土地の方が、今日、よりその価値を認められるようになってきている。近年は、小規模な不動産を併合して大規模なそれを所有する者も多い (Carroll 1995; 不動産業者へのインタビューより)。また、小規模な土地は、まとめ買いできるときに数エーカーの土地に付け足されている。自然保護、ローカルな土地信奉、また街そのものが、緑の空間と景色を守ってきたのである。

ベッドフォードの歴史

ベッドフォードは、コネチカット州スタンフォードのイギリス人移民たちが 1680 年にモヒカンたちから正式に買い取って以来、住民たちに称揚されてきた。しかし移民たちは、不動産や自然環境に関して、ネイティブ・アメリカンたちに十分な理解と敬意を示してきたとは言えない。ネイティブ・アメリカンのどの村も、そのすべての住民によって領域が保有されていた。個人は土地を耕す権利を持っていたが、森林が再評価されるようになってから、それを失った。土地の譲渡は、一時的で特殊な用途と見なされた。17 世紀、その地域のネイティブ・アメリカンたちが、土地を "sale" するという英語の意味を誤解しており、イギリス人たちと共に継続して利用できると思っていたという証拠もある (Cronon 1983, 66-67)。モヒカンのハンターたちと共有していた狩猟地もあったが、イギリス移民が増えるとともに、徐々にインディアンたちが利用できる領域は減っていった。今日、彼らの誤解は、歴史的に不運な出来事と見なされており、政治的問題としては扱われない。このケースに際してアメリカ人の多数派（とりわけネイティブ・アメリカンを除く）であるベッドフォード住民は、当地の景観の歴史が倫理的に中立で政治的暗示を含まないものと考えている。

今日、ベッドフォードには最初の植民者の子孫たちが 90 人住んでおり、彼らは街の財産として一目置かれている。イギリスの伝統で、植民者たちは村を、ストリートや住宅地、共有地に沿って、つまり

今日村が位置している周囲に割り付けた。当初、各々 12 エーカーの牧草地と畑を割り振られ、のちにそのエーカー数は追加された。1972 年、植民者は今日のベッドフォードに当たる土地をモヒカンから買い、現在の境界線を設けた。現代のネイティブ・アメリカンたちはイギリス人の法が疎外に関わることを知っているが、それでも彼らは土地を売るだろう。なぜなら、彼らに残された過密の土地は、彼らにとって価値のないものとなっているからである (Cronon 1995, 103-7)。17 世紀のベッドフォードは、さらに大規模な生態地域（過密とは程遠い、入植者によって発見された未開の森）の一部であり、それは Cronon (1983, 25) の言葉で言えば「著しくむき出しで、時にほとんど大庭園のようだった」。ベッドフォードの原住民は季節に応じた農耕、狩猟、採集を営んでいたため、これは一部のことである。当地の人口は元々、農民を中心に構成されていた。毎年春と秋に、新たな穀物用畑地の整備と、狩猟のために森を開く目的で、森の大部分が焼かれていた。現代のアメリカ人は、北アメリカ大陸の自然史を、インディアンが自然にインパクトを与えず調和的に生活する大いなる処女地 (Cronon 1983, 12)、といった具合に捉えている。当初イギリス人たちに勇ましく従えられた野性が、現代の過剰な開発によって危機に瀕しているという見方である。こうした語りは、簡素な生活に価値を置いたロマンチズム、高貴な野蛮人という理想、そして「失われた」自然を神聖なる高みへと昇華させる思想 (Nash 1982; Oelschlaeger 1991; Trrie 1994) に基づいている。にも拘わらず、ロマンチズムの物語は今日、ベッドフォード住民のアンチ開発事業に重宝されているのだ。開発の手が入っていない、野性的自然の“孤島・回廊”を守り、そこに環境の純潔と脆さを割り当てることによって、今日の環境保護主義者たちは、失われた楽園の回復⁹⁾を願っているのである。

ベッドフォードの岩石質の土壤に拘らず、線路は比較的裕福なイギリス人農民たちのコミュニティの内部に敷設され、NYC の市場に牛肉やミルクを供給した。19 世紀半ばから、ベッドフォードは郊外化の最初の波に乗り始めた。NYC とベッドフォードの距離を縮めた線路がさらに遠方の肥沃な農地へと伸びたことで、19 世紀の第三段階には自給・商業的

農業とも衰退した。ベッドフォードは、見晴しのいい田園のみならず野性的で新奇な風景をも求める裕福なニュー Yorker のための、田舎の隠れ家となった。ベッドフォードの各地で活動的な農業が行われなくなっていき、開けた土地に木々が生長した。やがて、低賃金の農民労働者がいなくなって管理コストが賄えなくなった田園の景観は、ますます野性的になった。森林は居住者たちにとって象徴的存在となり、アメリカの至宝の一つとなっていった。19世紀のアメリカ人が自然保護の倫理と僅かな「地位財」としての自然の審美的評価を展開させ始め、景観はますます、貴族的な親英派アイデンティティの要求へと結び付けられていく。ベッドフォードにおける新しいタイプの居住者、その国家・国際的資本主義経済の関心は、農業よりもむしろ産業主義、法律、財政にあり、ますます卓越する自然は、有効利用よりもむしろ審美の対象であった。

19世紀末、ベッドフォードはロマン的な郊外となって NYC のエリートたちを魅了し、ある者は週末、夏期の市民農園に出かけ、ある者は定住者となった。通勤者にとってベッドフォードはマンハッタンから遠過ぎず近過ぎずだったため、早くから開発が進んだ。しかし、1920年代には、開発拡大への圧力として、先見の明ある者が厳しいゾーニング法を制定した。最小25エーカーを提案する者もいたが、4エーカーが妥当（少なくとも法的に弁護できるとされた）。

1930年代の世界大恐慌の間に、巨大不動産の一部は下落し細分化された。WWII後にゆっくりと移住の第二波が訪れ、小さな家屋も景観に加えられるようになった。1960年代、ベッドフォードの外観は緩やかに朽ちていき、住民の多くはカジュアルなライフスタイルの価値を欲し、理解するようになった。しかし1980~90年代、ウォール街が景気づくと、都市の新たな富裕層が不動産購入に訪れ始める。金融業者と共に、弁護士、広告代理業者らが、NYやロスのけばけばしくもせわしない生活に幻滅し、ベッドフォードの名士となった。彼らはみな、ベッドフォードを健全な田舎暮らしの場と考えた。今日、ベッドフォードは裕福なベッドタウンとなっており、その景観には広大な緑地と、多くの牧場をたたえた見晴しの良い田園、保護された森林が卓越している。

ベッドフォードにおけるゾーニング

現在ベッドフォードの景観は、米国各地で見られる排他的なゾーニングの慣習によって維持されている。市街のゾーニングは、広大な不動産を4エーカーほどの高価で手が出ない土地に細分化する厳重な環境法規により、その排除の影響においてますます悪化している。市街の土地の約80%が最小4エーカーの一戸建て用地として区切られ、約95%が1エーカー以上の宅地となり、二世帯および共同住宅は1%以下となった。新築の許可を得るには12年かかり、それだけの長期間待つことのできるディベロッパーは稀だった。その上、レーガン時代以降は、居住可能な宅地を造成するディベロッパーにインセンティブを与える綱領がなくなった。こうしてゾーニングは、ウェストチェスター郡の最下層住民たちへの施設供給という重荷を、もっと貧しく、開発への抵抗がない他のコミュニティへと、効果的に移し替えた。

排他的ゾーニングが住宅の原価・居住可能性に与える影響と、環境問題との間の密接な関係は、1970・80年代、ニューヨークのメトロポリタン地区における数件の訴訟を通じて明らかにされた。裁判官はすべての街に対し、“公平な配分”による住居の供給を命じた (Rose and Rothman 1977; Platt 1991)。そこには諸問題を区分してしまう傾向があり、そのために、表面上は政治的問題から切り離された諸問題間の相互依存性と外面性が見落とされる。自然環境に対するヘゲモニックなアメリカ人の価値観に基づく称賛や、脅威にさらされている環境・景観審美的保護、また、コミュニティの政治的自治を重んじるローカリズムなどによって、上記の構造や不公平な地理的・階級的影響への認知が惑わされている。

実施したインタビューでは、ほとんどすべての人が、一つの街で行われたことは周辺の街にあまり影響しないと信じ込んでいた。しかも、階級やジェンダーに関わりなくすべての回答に、地域の自律を神聖視する信仰が遍在していることが、ベッドフォードの排除性に抵抗するための見通しを暗くしている。居住地の隔離と戦い、住宅に正義をもたらそうとしている数少ない団体だけが、街の政策の社会的影響

を隠蔽するヘゲモニー的な歴史・自然への審美的言説に抗っている。我々が排除について問うとき、住民たちは、ゾーニングの目的は審美であって分化ではないと宣言する。あるインタビュー回答者は言う。

「ベッドフォードでは、裏の垣根越しや、お隣と遊ぶ子供たちにさえ、あなた方が郊外の団地でなさっているような、例の社交とやらがありません。近所に醜悪な建物が建ちさえしなければ、隣人が黒人だろうと白人だろうと、金持ちだろうと貧乏だろうと気にしない。貧乏な黒人一家が暮らす小さなコテージは、草原や森林のど真ん中に建っている新築マンションよりもむしろ素敵であって、私たちは理解し、我が子のように愛しています。だから私たちは自分の土地を売るよりはむしろ、土地信託に入れようと思っているんです」

別のある者は言う。

「ベッドフォードでのステータスは、素敵な土地を持ち、野暮な土地を持たないことです。私の風景をまずくする建物を建てない限り、あなたが誰であろうと問題ありません。開発は、締め出したい。ベッドフォードは特別だから、郊外化してはならないんです」

またある者は言う。

「隣人が気に入らなければ、会いもしないし、パーティーに招きもしない。ゾーニングは分化ではなく、緑地、とくに湿地帯と森林の保護のためにあります」

自然環境とその保護に結び付けられた審美的価値は絶対善で、政治構造や居住可能な住宅の供給、排除的ゾーニングなどとは無関係だと思われる。ベッドフォードの村では、人口や資源の不公平な空間調整が、住民と政府の環境重視によって隠蔽されている。ここで一度街の責任から視点を移し、メトロポリタン地区における居住可能な住居の公平な配分について考えたい。

田舎の避難所としてのベッドフォードの創造

荒野の中に孤高の地を持つことの審美的価値は、ベッドフォードのほとんどの住民たちにとって疑いがないものである。自然の審美的視点によれば、ベッ

ドフォードの広い森と樹木の茂った家々は、整った芝に囲まれた家などで構成される街よりも“自然”である。こうした、荒野としての自然の理解は、(社会化された)人間と文化を自然の残余から切り離すことを前提としており、景観は文化の立ち入れないものとして現れる。こうした言説は、排除の構造と、ベッドフォードの景観維持の慣習を助長する。

ベッドフォードは、都市主義のみならず中産階級の郊外主義からの避難所としても長い歴史を持っているが、安定性と社会的アイデンティティをもたらす神聖な空間を保全するための、新たな試みも現れ始めている。ベッドフォードのような場所は、権力・特権のグローバルネットワークと高度に相互連関している。実際、グローバルネットワークにおける最も著名な人物たちの一部はベッドフォードに住んでいる。すなわちジョージ・ソロスや、ニューヨーク銀行、多国籍企業、法律・株式仲買事務所、主要世界航空社、ラルフ・ローレンのような巨大メーカーの各最高責任者のような人々である。都市とベッドフォードのエリートたちを経済的に支えるグローバルネットワークは、人々を魅了すると同時に、反発を受けてもいる。19世紀末から、ベッドフォードのエリートたちは、その公的・ビジネス的生活の中でコスモポリタンになり、都会的に洗練されていったが、その私生活の多くの面においては、きわめて反都市的であった。電車によるアクセスの便が良いことで、ベッドフォードは、高度にコントロールされた空間、また“権威ある”田舎のアメリカ共和党的アイデンティティが育まれ得る、私有化された領域となっている。その景観は、視界の及ぶ限り、高度にコントロールされた審美的産物として扱われ、人は車や馬で数マイルを進む間“工業や、醜悪・没趣味なものを見ることはない”のである。

ベッドフォードの住民は、居住領域を NYC の労働領域から空間的に隔離することで、分離の幻想を持続させており、自らの視界のすべてを所有するイギリス田舎紳士の空想と、小規模農業・個人主義的農地改革主義をもたらすジェファーソン主義的アメリカ人の感傷的な田園主義とを、融合させている。このことは、インタビューに答えた住民の言葉や、新聞の論説、都市と社会の歴史、不動産広告などから明らかである。“貴族主義”“偉大な地所”“見晴しの

良い遠景”などの述語が, “簡素な田舎暮らし”“田舎風”あるいは“田舎”の魅力, “農民クラブ”(貴族主義的なエリートの会), “計算されたみずぼらしさ”“植民地時代風の簡潔さ”といった述語の傍らに, 座り良く収まっている。住民たちは, 緑の空間を保持する上での自己完結・自己正当化に拘泥しており, 空間的隔離によって維持される無垢の幻想に支配されている。住民たちは, 空間的・視覚的に, 人種や貧困といった, 不安を生む疑問から自らを隔離し, Pile (1994, 265) の言う「苦しみのない特権」⁷⁾に関わるような, 社会的重大性を想起させるものすべてを, 視界から遠ざけている。

そうした幻想を保持することによって, ベッドフォード住民は, 「排除によってしか為し得ない一貫性への努力」という Pile (1994, 273) の言葉に当てはまっていく。ベッドフォードは, グローバリゼーションの悪影響や, 田舎のアンглоアメリカ共和主義者の拠点への民族混成性の侵入からの, ノスタルジックな避難所と見られている。創造・維持され続ける経済的・エリート社会的アイデンティティは, 彼らのそれを守り合法化するための新たな空間的戦略を計画しようとしている。私たち地理学者は, まずは複雑になるグローバル化の権力の幾何学 (Harvey 1989; Massey 1993), その内側で, 現代の複雑さへの反動的対応がいかにして保守的な力として再強化されているかを理解するための, 現代的な場所・ロカリティ・ローカリズム・景観の再概念化を, 要求されているのである。

ベッドフォードにおける, 野性的自然

ベッドフォードの自然保護に議論を移す前に, 社会的に構築された自然の思想に関わる問題に奇異なほど執着する我々の立場を明らかにするための, 回り道をしたい。地理学の文献における継続的な議論 (Demeritt 1994a, 1994b, 1996; Harrison and Burgess 1994; Livingstone 1995; Walton 1995; Gandy 1996; Willems-Braun 1997; Proctor 1998 等の概要を参照) が証明しているように, 思想・言説・テキスト・神話・想像に焦点を絞る立場はどれも, あまりにしばしば, 理想主義者あるいは相対主

義者と(ときに腹黒く)誤解されている。たとえば, 「野性は人間の創造物である」と言うことは, 存在論的な陳述ではなく, 人間化されない景観を, 人間の知識に依拠しない存在という言葉に(実体ではなく語られるものとして)あてはめることを意味するものではない。野性は, 一部の地理学と歴史学によって人間的に無理強いされたカテゴリである。それは, 人種あるいは肌の色などに基づいてカテゴライズされる“現実の”人々が受けている, 民族の概念のようなものだ。カテゴライズが“現実”になされると, 概念は“現実”となり, 人々の生活にきわめて物質的な効果を及ぼすようになるが, それは人間的に創造されたカテゴリであり, ときに暴力的な歴史が刻まれることはあっても科学的基礎は持っていない。我々は Cronon (1995, 69) の「野性は完全に人間の創造物である」という言葉に賛成する。なぜなら, 彼が言うように, 自然は「とりわけ魅力ある欺瞞」だからである。また Cronon (1995, 69-70) は, 「私を野性の中の非人間的な世界に加えてほしい, などというのは, 我々自身の発明力からまったくかけ離れている」と続ける。こうした記述の中で我々の興味をひくものは, 野性の思想と, 排除のポリティクスにおけるそうした行動の役割である。それらの思想はきわめて現実的であり, 物質的影響力を持って, 物質的景観として表されるのだ。

文化資本としての自然の称賛

Schmitt (1990, xvii) が指摘するように, 「野性的自然は, 地理的特徴と同様に, アメリカ人のレトリックのイメージに変えられ」ている。“恐ろしくて住めない”野性が初期イギリス移民に嫌われたこと (Thomas 1983, 194) は, 現在ではアメリカの最も貴重な天与として, インスピレーションと喜びの源泉として, 捉えられている。19~20世紀のアメリカ人が自らをアメリカ野性の産物であると宣言したとき, 彼らは, 自らがイギリス・ロマンチズムの産物であることを, もちろんその事実のためにこそアメリカ的なのだが, 暴露してしまった。今日のベッドフォードの自然の典型は, 20世紀末の環境主義の導入に再連結される 18~19世紀のロマンティックな見

地 (Marx 1964; Nash 1982) の、再組織化と捉えられている。これら二つの伝統は、しばしば衝突の歴史 (Pepper 1986) を重ねたものの、審美を強調するロマンチズムはベッドフォードで支配的な見地となり、合法的と思われている近代科学のレトリックに、巧妙に融合・偽装 (常に陰謀的というわけではないが) されてきた。ロマン的・審美的自然のモデルは、今日のベッドフォードにおいて、分化の貴族主義的モデルに通じるエリート社会的ステータスの追求を、助長している。ベッドフォードの自然を構成したロマン的モデルには、主に二つの役目がある。一つは飼いならされた自然である田園、そしてもう一つは (この論説の残りの焦点であるところの) 16世紀から絵画的あるいは高尚なものとして知られる、野性的自然/野性という視点である。

ベッドフォードの中でもとくに親英派たちの間では、田園の審美が急速に損なわれていることが嘆かれているが、ほとんどの住民たち (とくに新たに転居してきた) はそうした衰退に特別な注意を払っていない。その代わりに彼らはもっとユニークなアメリカのシンボルであるところの、理想的景観としての野性に注目している。荒野の開拓をユニークなアメリカ文化の産物と捉える見方は、少なくとも独立戦争まで遡ることのできる歴史 (Schmitt 1990, xvii) を持っている。20世紀半ばに入る以前、自然の最も野性的な状態を審美的・ロマン的に称賛する都市化されたエリートたちは、相対的に少数だった (Nash 1982; Stilgoe 1988, 22-23; Bunce 1994)。Williams (1989, 15) は、19世紀のエリートたちの「原始主義とロマンチズムは、ほとんど退廃的な流行となり、また良く教育を受けた紳士の目印となった」と述べている。Cronon (1995, 42) は言う。

「野性は、開拓神話を具現化するものとなった。もちろん、皮肉なのは、その過程において野性が、高度な文明化を反映して、心酔者たちの逃げ道となったことである。19世紀以来ずっと、野性の称賛は裕福な都市の人々にとっての主たる課外活動であった。田舎の人々は一般に、富裕層の理想である無計画な土地と、実務の土地とが遠くかけ離れたものだと知っている。土地との関わりから遠ざけられている人々だけが、野性を、自然の中で生きる人間のモデルとして、実際には生活できる場所の残されていない自然へのロマン的イデオロギーのために、支持することができるのである」

しかしながら今日、野性は自然の具体的な真髄として広く捉えられており、自然の視覚的消費は文化を富ませるものと見なされている。野性を審美専用のもんとして思い描く趣味は、文化資本として考え得るものであり、そうした趣味はますます増加する人口によって磨かれていく。

20世紀初頭、コミュニティのエリートたちは、自然や古い田舎の共和主義的生活への賛意を、子供たち (とくに移民家族と都市周辺の子供たち) に、理解させる義務があると自覚していた。森林は、アメリカの愛国的義務に基づいて、近代文明化の破壊的な影響から守るべき儂い遺産と見なされた。こうした自然運動は、階級に基づく、また、愛国的でときに土着文化保護主義者の含みを持った、反近代的審美の産物、その一部である。1913年、ローカルな自然の愛好者たちがベッドフォード・オードゥボン協会を設立した。彼らの仕事は、自然およびそのスチュワード役である市民の研究、そして教育であった。1950年、同協会は僅かに増資して、郡立公園付近の小道に記念碑を設置する役目を担う、ベッドフォード庭園クラブとなった (Northern Westchester Times 19 October 1950)。そうした方法で自然を支えることにより、グループのメンバーはベッドフォードのエリートたちの間での立場を確立・保全していった (Bedford Garden Club n.d.; メンバーと他の住民へのインタビューから)。

こうした初期のスチュワードの目的意識は、学校の生徒への学習計画の供給役を保持するために組織された自然センターにおいて、未だに優勢である。それは彼らの様々な自然保護計画に、積極的に子供たちを巻き込んでいる。我々がインタビューを行った両親たちの多くは、そうした自然教育に熱中している。多くが、子供たちが田舎で成長すること、自然から学習するために彼らを森へ連れていくことの重要性を語った。ある者は自然保護についてこう語る。「それは私にとって、ベッドフォードが持つ最大の魅力の一つです。たとえライム病にかかっても、子供は自然に晒されなければなりません。自然は、街で学べない価値を教えてください」。別のある女性は、母親から、大学の願書のために、また、子供のように森の中で長い時間を過ごすことが彼女に個性の力を与えてくれたという事実を表すために、森に

まつわる私的なエッセイを書くよう勧められたと言った。また別のある女性は、“森や野性的な生活の方法”を知らない“都会の少年”を育てることを拒絶したために、都市での仕事を諦めさせられたと語った。彼女が暗に語っていたのは、田舎の、森林の環境が子供にとって心理的にも健康な場所だということである。

20世紀の半ば、一部の地主たちの間には、絵画的な景観を生み出す不動産制度が、土地の細分化という脅威にさらされることへの懸念があった。成長を著しく妨げる厳しいゾーニング規定、そして、過去数世紀のベッドフォードにいまより多くの樹木が存在していたことなどまずないという事実にも拘わらず、田舎の、森の繁るベッドフォードの自然が失われることへの恐れがあったのである。自然保護の創造によって土地を市場から引き離すことが、そうした脅威と闘う唯一の道であると目された。1953年、五人の富豪が「マイアナス川峡谷・野性的生活の避難所・植物保護団体」を設立した。それがやがて、国立の非営利保護団体である自然管理委員会の、開拓地獲得計画へと変化した。設立からわずか11年後の1964年、保護地区は、アメリカで初の「自然歴史的ランドマーク」に登録された。現在保護地区は、森林、湿地帯、放棄された農地を合わせた616エーカーから構成されている。NYC郊外の小規模で比較的無名な峡谷が、より全国的に著名で大規模な他のどこかよりも先にランドマークとして登録されたことが、まずは驚きである。しかしながらその指定は、確実に、峡谷自体が有している自然の驚異や生態学的重大性よりも、エリート階級と団体設立者たちの景観趣味に、より多くの便益をもたらすものであった。

簡単にはそうとわからず、一般的な認識とは逆のことだが、所有地の利害関係が野性を構成する要素となっているのである。ローカルに語られるベッドフォードの環境史は、白人移住者たちが不適な野性を勇敢に切り開いた田園・農村景観の物語である。現在、明らかに無意識の反転なのだが、荒野のわずかな土地は、人間の居住地の浸食から守られている。すでに述べた通り、ベッドフォードの農村景観は長くイギリス移民を優先してきたのだが、その神話的な歴史は、ロマンティックかつヒロイックなもので

もあった。自然保護が守るのは、原始の野性ではなく、古い農村景観を分割した土地と、湿地や険しい峡谷(図6)のような限界耕作地である。この点で、神や自然ではなく人間が、ベッドフォードの“原始的野性”を創造したと言える。この野性は人的営為のみならず、所有地関係の慣例化されたシステム—第一にネイティブ・アメリカン、続いてアングロ・アメリカ農民、そして近年の高度なゾーニングを通じて土地売却を厳格に制約する裕福な都市生活者ら—によって、生み出されたのである。仮に同地域が富裕層によって管理されなかったら、税金対策のために自分の土地を手放すような金持ち以外の誰も、自然保護に目を向けることなどなかったに違いない。

ベッドフォードの野性は、田園と絵画的風景に価値を置く、階級に基づいた審美から生み出される。田園景観のように、ベッドフォードの野性は、生産と労働が緊密に結びつく近代都市景観から逃れてきた都市の産業・金融界、その富によって、生み出されたものである。そうした疎隔の感情は、プライベートな家屋を都心からの避難所として空間的に分離することによって、獲得できる。これらの空間的な取り合わせは、目新しいことではない。Thomas (1983, 286) は、工業生産物を「醜悪かつ不快」なものと思えず18世紀末のイギリス審美家たちの、教養ある趣味について記述している。しかし、と Thomas (1983, 287) は加える。

「そうした人々は時に、自らの審美的感覚が生産構造の中で障害物となることを容認した。次世紀ともう半世紀の間、それらの私的感覚は、空間保護、景観庭園、緑地帯、動物の聖域、すなわち一般社会の本質的価値への最小限の抵抗を強調する存在であるところの、人工オアシス、あるいは理想化された世界の万華鏡を創ることによって、満たされなければならなかった」

数年のうちに、マイアナス川峡谷保護団体は、小規模な土地の寄贈を数多く受けた。峡谷における寄贈された土地の多くは、極めて険しいか、もしくは沼地であり、それらは歴史的に極めて小さな経済的価値しか持っていなかった。こうした土地の寄贈に価値を認めることはできず、単に、ほとんどの土地の経済価値が乏しいことから結果として“野性”が生まれたに過ぎないと言える。この土地は近年、湿地・

急斜面・道路上の住宅建設を禁じるローカル法により、さらに下落した。同法は合衆国の環境法よりも嚴重なものであり、極めて強制的に、潜在的に建設可能な土地を減少させていった。審美（実利を超える喜び）と、緑の空間や眺めへの欲望に重きを置くことで、所有地に隣接する未開発の土地は、所有地に隣接するというだけで、所有地同様の価値があるものとなった。所有するのではなく、視覚的な利益のすべてを得ることで税控除を受けられるなら、土地を寄贈するのをもっともである。ある意味では、近年のローカル土地法が“野性”を生んだと言えよう。

ベッドフォードの新たな“野性”の中で暗号化されている、所有地関係のもう一つの方法は、名付けを通して行われる。マイアナス峡谷保護地区には、土地の寄贈者やまた別の形で保護地区をサポートする人々を讃えるための、夥しい数の銘板がある。5人の創設者たちの名前は、同地区入口の石碑に掲げられたブロンズの銘板に明示してある。そのほかの銘板は、訪問者たちに対して、彼らがテリー・ローレンス記念森林公園やジェームズ&アリス・ド・ペスター・トッド森林公園を歩き、サンフォード小滝を眺め、エディス・フェイル歩道橋を過ぎ、ルーシー・D・S・アダムス記念ベンチ（図7）に腰掛けていることを告げる。このように、価値あるものに名を刻むことによって自分自身やその家族を称賛できる者たちが、自然を誉れ高き“文化資本”に変換するのである。精神的・道徳的な権力に強く影響する、貴重な“自然の孤島”に、永遠に自らの名を残すことは、エリートたちにとっての“野性”の象徴的重要性を高めた。ちょうど、村の役所にある銘板が、歴史は著名人たちの慈善を通じてあなたたちに与えられるのだ、と告げているように、ローカルなエリートたちは、認識のすべてをその保護に向かわせることと引き替えに、街に“自然”を与えている。そこには明らかに、保護される野性以上の何かがある。自然は、エリートの道徳的な権力を増大させ得る、文化資本的なものである。

マイアナス峡谷保護地区の、入口の標識には、「あなたは公園ではなく、私有保護地区のゲストです。私たちの唯一の目的は生物多様性を保護することであり、公的なレクリエーションではありません」とある。これには数多くの問題がある。訪問者が所有

者のルールに従うのならば、そこは歩行を許可された私有地だということになる。ここでの“私有”は、共有地の信託という、また別の種類の所有地関係となる。第二の問題は、これが“公園”ではない、つまり含意としては、中産階級のレクリエーションの場ではないということである。これは、大いなる敬意と礼と学問的な認識を以て“野性”を注意深く扱うという、審美的方法である。マイアナス峡谷保護団体は、保護活動において、伐採前の小道 *precut trails* を歩くことなどを初めとする、12の禁止項目を設けた。こうした保護を受ける場所の価値は、人間を環境から隔離することに基いている。管理された世界の自然は、視覚的に消費される展示物に過ぎない。保護地区は博物館の展示物のようであり、人はそこを歩くことはできても視覚的な作用しか受けられないという、屋外の巨大なジオラマである。そこは、見物して考えることだけができる場所であり、階級に基づく審美が環境へとエンコードされる場所であり、それが同時に街の排他性を保全するための政治的な武器として振りかざされているのである。

所有地関係は、資本としての自然という概念を通じた自然保護の中で、エンコードされる。自然は、「我々の最も貴重な遺産であり、未来の世代に向けてそれを守っていかねばならない」「我々は子孫に伝えるべきこの土地を託されてきた」といった言葉や、それに似た言葉で語られることが多い。自然の概念は、経済的合理性、世代から世代への富の相続という資本主義の言語で普及させられた。峡谷入口の標識は、そこでの「自然は完全に保護される」べきことを確認し、訪問者が「孫たちのために鳴鳥27種の保護を助ける」よう駆り立てる。ここでの自然の理念は、次世代に受け渡される資本の理念からそれほど遠いものではない。経済の言語は、野性的自然は市場から切り離されたものだ、と記述するのが常であった。しかし、自然のロマンチズムは、究極的には、自然や精神を含むすべてのものを資本に転換して手を引こうとする、中産階級的精神の産物なのだ。ロマンチズムによって曖昧にされる文化資本と経済資本の修辞学的連結は、環境保護における強力な政治的理念となっている。

審美的環境主義

自然保護団体が訴えるのは、特定の生態系を保護することである。ベッドフォードの野性は、未熟な目で見れば、ほとんど人間の活動に影響を受けてこなかった環境の形態と映る。この野性の価値は、西部で長く続いてきた人間と非人間との区別によって支えられている。人間中心の自然・文化二元論を克服しようと試みるその他の一般的な環境に対する観点からすれば、こうした原始的な自然という見地は認められない。しかしそうした否認は、あまり相手にされないうか、もしくは、審美的環境主義を生態学的関心よりも重視する者たちによって面倒なものとして扱われている。ベッドフォードの野性は人間の創造物であり、自然の法則の問題であるにも拘らず科学的に明証できない二元論に基づいて発明されたカテゴリであり、あらゆる文化的行為に優先して存在し、今日では教養とステュワードシップを通じて徹底的に心に刻みつけられ変形されている。それを徹底的な洗練だと言う者もあるかもしれないが、その意味での野性は、原始的な自然を称讃する審美的感覚を発展させるよう“洗練された”人々の、また、きわめて広範囲に渡って人間的に生み出され庭園のように保全された、野性であると言える。

この矛盾した二重の意味は、保護団体の著作物に見ることができる。『マイアナス川峡谷歩道ガイド』(n.d., 頁番号なし)は、現在の“手つかずの untouched”土地を保全するボランティアを集める際に、未踏の untouched 自然を守るよう訴える。そのガイドは、保全の方針を以下のように記している。「マイアナス峡谷地区は、人間の直接・間接的なあらゆる介入から切り離されており、自然の道筋に一致する地域開発のみがなされる限りにおいて生きることのできる動植物たちの“野性の孤島”として保全されています」。この記述から、環境保護は人の管理から離れた“孤島”なのだと思える者があるかもしれない。しかし、ステュワードシップ委員会からの報告書は、保護団体の主張する方針と真つ向から矛盾しており、野性を、文化的に独特な、審美化された景色に一致させるために、自然を厳しく管理するという、実際の方針を暴露している。そのレポート (Mianus River Gorge Preserve 1993, 2) は以下の

件で始まる。

「自然保護ステュワードシップ委員会にとって第一の、かつ最も重要な義務は、峡谷が、自然かつユニークな状態に保たれているのを確認することである。なぜなら、過去 300 年に多くの自然要素が我々の景観から除去されており、今日我々は、保護地区の生物の多様性を改善あるいは保全するために、生態系の多くを管理しなくてはならないからである。我々はいかにして、森のネイティヴ・アメリカンたちの 8,000 年に渡る目まぐるしい輝きを、再現することができるだろうか？ どうすれば、牧草地を、危機に瀕した虫や鳥たちの生息地を甦らせることができるのか？ 森を破壊するオジロジカの群れの自然な増大に対して、我々は何ができるのか？」

自然に介入せずその変化を容認することと、それを管理することとの間にある差異は、平衡を保ったままで、触れられずにいる。報告書の最初の文は、「峡谷の自然かつユニークな状態」に言及している。問題はその次の「過去 300 年に多くの自然要素が我々の景観から除去されて」という文章にある。ここでは、修辭学的に、ヨーロッパ人の到来が文化による自然圧迫の始まりとして記録されている。文頭の、景観から除去されたという「自然要素」と、「森のネイティヴ・アメリカンたちの目まぐるしい輝き」とについて、明確にしよう。もしネイティヴ・アメリカンが、18 世紀ヨーロッパ・ロマンチズム以来の、文化よりも自然に属する高貴な野蛮人として理解されているなら、そうした行為は、“自然”としてのみ捉えられるはずである。西洋の文明化を批判する意図にも拘らず、この高貴な野蛮人の神話は、文明化の頂点に立つヨーロッパ系人 (Willems Braun 1997 を参照) たちよりは幾分自然に近付きつつも、暗黙の人種階層に基づいている。森の焼却を選んで論ずる中で、委員会は、ネイティヴ・アメリカンが森のある象徴の保全を演ずるという役割に気付いている。しかしながら、それを自然と呼びながらも、それがネイティヴ・アメリカンの経済、言うなれば“神の経済”の産物であることを見落としているのである。

このことは、保護の目的に関する興味深い問題を生じさせる。委員会は、野性の孤島の創造を通じて“生物多様性の保護”を訴えている。しかしながら、保護団体の出版物は、それらの訴えを支持している

という証拠を伝えようとはしない。ベッドフォードの休息所は、街の法律で守られた、きわめて深い森林と豊かな湿地である。あるいはそれらの地区では生物多様性の度合いが立証されているかもしれない。だが、その地区は、多くの種のための孤島を構成するにはあまりに小規模（たった 600 エーカー超）である。ある種の動物は、その地区に押し込められた場合、繁殖を維持できない。それゆえ、その保護地区は、いかなる科学的叙述の意味においても、野性の孤島ではない。それは、自然の性質によってできた孤島ではなく、制度化による孤島として記述されるべきものである。それは私有財産の垂種であるがゆえに孤島なのであり、自然と文化の断絶という、19 世紀のロマンチズムと 20 世紀の生態学的修辭による文化的理想に取り憑かれたものなのだ。

“野性”に対する彼ら好みのスタイルを保持するために、保護団体のスチュワードシップ委員会は、峡谷の研究を、『調査と勧告の術策』(Mianus River Gorge Preserve 1994, 3) と銘打たれた 220 ページに渡る報告書にまとめる作業を“国際的エキスパート”に委任した。そのタイトルは、自然は人間の管理から逃れられないと確信していた啓蒙時代の合理性を明示している。人々が自然を放置する理念を支持しているときさえ、彼らは、委員会の名称に明白なように、自然は最終的にスチュワードシップの作法という“文化”に支配されるものであるとし、野性を寛大に扱うことができないのだ。ここで現れる矛盾は、自然環境をダイナミックなものとして理解する科学的認知と、文化から自然を切り離すという芸術的な—実際のでなくとも—幻想に依拠する土木工事やロマン的・審美的観念とを区別するなら、理解し得る。Proctor and Pincetl (1996) は、自然と文化が緊密に絡み合い、実際にはこの幻想が生物物理学の人間ネットワークへの綿密な理解に置き換えられるべきときに、生物多様性志向の自然保護努力は、しばしば純化と隔離を目的に行われると批判している。

自然保護と相対する、邪魔の入らない自然というロマン主義的主張にも拘わらず、そこには官僚的合理性の適用と、科学的認知・合理的管理技術の適用における階級化が見受けられる。峡谷で見られる 27 種の鳴鳥が、歩道の入り口に明記されている。地区

内で見られる樹木・低木・野花のリストは、歩道標識に載っている。識別標識が、ウエストモアランド聖域の、選定された樹木に付けられている。委員会はボランティアたちに、「我々は、みなさんが樹木の第二成長段階の掃除を手伝い、鳥や植物を監視し、失われた生息環境を再建し、水のサンプルを集め、四季を通じて不変の景観を撮影する仲間になることを望みます」(Mianus River Gorge Preserve 1994, 3) という、『調査の術策』にあった勧告を受けられるよう呼びかける。管理と監視の技術を採用することで、委員会は、自然は監視され撮影されるものだと主張しているのである (Evernden 1992; Wright 1992 参照)。では、この野性は庭園とどう違うのか？ 絵画的な庭園は、19 世紀～20 世紀初頭の英米で極めて一般的なものとなり、それらは今日のアメリカ人エリートたちの間では伝統として継続されている。象徴的には、19 世紀に見られた庭園は、森林と大差なかったが、その迫力を欠いた解釈であった (Birmingham 1986, 182-83)。アルカディアの神話では、理想化された自然であるエデンの園は、庭園と捉えられていた。“野性的な”自然の審美は、環境保護への関心から、今日のアメリカで補足されてきたものである。広範で一般的な“新しいアメリカの庭園”は、“自然の植物”を“裏庭にあるミニチュアとしての生態系”の創造に用いる (Druse 1994, 27)。こうした動きは、ベッドフォードで広まっている。友人関係や庭園クラブを通じて、刈り込まれた芝や装飾的な木々の郊外的審美を拒絶するよう学習されていたのである。

ガーデニング協会とそのスポンサー、そして自然保護団体との間には、緊密な関係がある。例えば、保護団体の主要寄贈者であるミセス・パトラーとミス・フリックの二人は、1913 年創設のアメリカ庭園クラブの内部団体で、きわめて排他的な、ベッドフォード庭園クラブのメンバーだった。最近マイアナス川峡谷保護団体に 30 エーカー近くを寄贈したミセス・ロックウッドは、記事の中で彼女の寄贈が「全国的に有名な園芸家、アメリカ庭園クラブのメンバー」としてのものであると告知している。マイアナス川峡谷保護団体の理事であるアン・フレンチは、「自然保護教育における特筆すべき貢献」を理由に、アメリカ庭園クラブからメダルを贈答された。つい

には、バトラー記念聖域はベッドフォード庭園クラブとベッドフォード・オーデュボン協会に管理運営されることとなった。これは庭園クラブに何かの思い違いや保護団体へのスポンサー行為があったことを示すものではなく、同クラブに保護活動を管理させるものでもない。保護団体が、類似の考えや科学技術に従い、概念的により広大な規模の“野性的な”庭園を考慮できたことを示しているのである。

今日、ベッドフォードの自然を300年前のような見方で見るべきであるとして、それにロマンティックな理由を示すのは容易だが、生態学的な理由を示すのは難しい。独特な景観審美の自然化は、再び、それを支持することの観念的な基礎を隠蔽しようとしている。そうした小規模な野性の孤島が生物多様性を強く支えるという理念は、科学に基づいた環境主義という、疑わしい見地から生じる。しかし、審美的環境主義の見地では、野性の孤島の規模は大きな意味を持っているのである。同地区の著名な生物学者であるマイケル・クレメンスは、ベッドフォードとその周辺都市の計画立案者は地区の生態学的・社会的ニーズに沿った開発の管理をすべきであるという—注意深いようには見えない—申し立てをした。彼は、低密度のゾーニングを、環境・社会の両面で、地域を越えて一様に強いことは、きわめてコストが高いと述べている。彼の主張によれば、開発は集約されるべきであり、より大規模な自然保護地区と生物多様性の高い生態学的に健康な地区は、一地区の規模でのみ計画され得るということになる (Anderson 1997)。この提案を真面目に受け取るなら—受け取られてはいないが—、審美的環境主義を支えるローカル化された意思決定パターンが、脅かされることになる。

要するに、ベッドフォードの野性は、視覚的な楽しみと住民の教化を目的に、私有化されているのである。部外者がそこから排斥されていなくとも、訪問者を導く標識がないので、保護地区を発見するのは困難である。結果として、受け入れられるのは初期のアングロ・アメリカ人、保護地区を訪れる裕福な家族と、扱いやすい数の部外者・学級である。街で最も利益を得ているのは、景色や散歩やドライブなど、森と牧草地のアドバンテージを持つ、地主である。言い換えれば、ローカリズムは、保護地区管

理の科学的修辞の下で操作されているのである。

自然保護は、合理性に抗して起きた反応の言説、超絶主義 *transcendentalism* の産物である。宗教と科学は自然への関心の中で融和され、たとえば、種は科学的主題のみならず、「神の偉大なる生命の鎖」 (Lovejoy 1974; Pepper 1984) という主題においても論ぜられた。エマソンのような19世紀の超絶主義者たちは、森を「神の植林地」 (Schmitt 1990, 141) として、最初の神殿であると見なした。そのため森の中を歩くことは宗教的儀式となったのだが、それは今日まで継続されている態度と言えよう (Thomas 1983, 216, 269)。ウエストモアランド聖域の自然博物館は、1783年に建てられ1973年に近隣住民と後援者によって保護地区に移転・復元された、長老教会の内部に置かれている。ここで、宗教と自然、そして歴史が結びつき、場所の道徳についての力強い主張を形作った。保護地区の樹木の標識には、超絶主義の古典的な主張が記されている。

「太陽による免罪の口吻／鳥たちの陽気な歌声／人は地上のどの場所よりも、森の中で神の心臓に近づく」⁹⁾

マイアナス峡谷保護団体にも、同様の超絶主義的要素が強いことに気付くだろう。保護地区の入り口には、自然に関する数多くの格言を含む標識がある。その中にはソローやミュア、バロウズらの詩編と引用もある。保護団体の最も重要なものは、「ヘムロック大聖堂」と呼ばれる、最古のものは樹齢325年以上と見られる木々である。“大聖堂”の中央には、「モンテ・グロリア」と書かれた標識があり、最初の創始者に敬意を捧げている。これは、1896年に野性を「近代世界の大聖堂」と呼んだ Eliot (Thomas 1983, 269) が引用している Eliot (1902, 655) の影響である。モンテ・グロリア、「栄光の山」という名は、同様に宗教的響きがあり、土地の寄贈を擬似宗教的行為へと変換する。審美的ロマンチズムの言説は、自然の景観の中で具現化されていった (Schein 1997)。障害物のない林地、歩行者に絵画的な情景を見せる伐り開かれた小道を保持したいという欲求の中に、自然の審美的変形を見出すことができるだろう。また、ベンチが葉の背景を抜ける小川を熟視できる場所に位置している (図7) など、保護地区における展望スポットの構築をも見ること

ができる。Alexander Wilson (1982) の「自然の称賛は、19世紀イギリスの芸術賛美から派生したものである」という言葉を思い起こすべきである。野性の保護における審美の重要性は、ウエストモアランド聖域入口の標識に記されている。「自然の聖域は、自然美を愛する者の称賛と感動のために、あらゆる自然を限界まで保護することに捧げられる」。ベッドフォードの自然保護団体の創設者は、インタビューで「自然の称賛は、審美的である以上に、我々自身を真に理解することの基本なのです」と付け加えた。彼女の自然に対するロマン的理解は、インタビューの端々に顔を見せた。

我々はベッドフォードの住民に、彼らが一般的に自然保護を何と捉えているか尋ねた。興味深いことに、環境あるいは生物多様性について言及したのは、ごく一部の人々—保全・保護団体に最も深く関わる—だけであった。最も一般的な回答は、保護地区が開発され得ないゆえに価値があるとするものだった。ある回答者は「自然保護は、土地を集約する点で重要です。それは住居という意味ではありません。田舎の風景が残る場所を維持するのです」と語った。不動産業者は、「自然保護活動は素晴らしい。永遠に守られる見晴しの良い空間は、街のいちばん大事な財産です。お客様もここから小さな街に越すのは嫌がります。彼らは自然を、障害物のない美しい土地を欲しているのです」と言う。こうした回答は、自然保護を、それ自身審美的に価値があるもの、また街全体の絵画的審美を開発を含む制限によって保持する手段と見なす、我々がインタビューした人々の典型である。

その他の人々は、保護地区を訪問の場所としてではなく、所有地間の視覚的防壁と見ている。一部の者たちが牧場の多い田舎の景観を好んでも、彼らは森林保護が次善策であり、作られた景観の上等さには遠く及ばないと考えている。回答者の一部は、ベッドフォードにはもっと多くの保護地区が必要だと訴えた。ある女性は「(自然保護は)見晴しの良い土地を守るために重要です。住宅を減らし、保護地区を増やすべきです」と言う。「もっと多くの人々が街に土地を寄贈すれば、増築などなくなるでしょう」と言う者もある。ディベロッパは「保護団体は、すべての人から土地の寄贈を受けようとしています。

たしかに大規模な土地を細分化したい人は皆、自然保護のためにと街に土地を寄贈する。しかし実のところ、この街の人たちは景色を守りたいだけなんです」と主張した。別の不動産仲買人も、「自然保護なんてインチキですよ。彼ら(街の住人)は審美的理由から自然を欲しているだけです」という類似の見解を示した。

他の人々は未だ、自身の、またその内にある美として、より間接的に保護に関わっている。ある女性は木々を愛している。「保護地区は素晴らしい。たくさん美しい針葉樹が見られます」。ある馬乗りは「保護地区はお気に入りの場所です。一部は馬で通ることもできます。そこには不思議な魅力があります」と言う。ニューヨークに通勤する者は、超絶主義的な観点から保護地区を見ている。彼は「森の中では、他のどこでも得られない隠遁の感覚と心の平安が得られます。自然は私にとって最も重要です。電車2時間の価値はありますね。これを守るためには、ゾーニングや自然保護が必要です。開発の圧力は斥けられなければならない」と語る。

しかし、保護地区の野性は、初期の恐るべき性質を取り戻し始めている。素早く処置しなければ長期に渡って健康に深刻な害を及ぼすライム病が、同地区で広く流行しているのだ。ある者は「私は何度も保護地区を訪れました。とても美しい。しかしライム病に感染するのではないかと心配です」と言う。また別の者は「以前はよくハイキングに出かけました。ライム病に感染してからは、自然保護地区には行ってません。もう森に入ることには興味がありません」と言う。自然は、最近までは人間への脅威になるよりもむしろ、人間に脅かされる存在の、すべてにおいて善良なものであるかのように見られていた。この地区におけるライム病の流行は、かつての、人が自然との相互作用に対して抱いていた恐れを取り戻させた。しかし、この恐れは人々に、自然を視覚的に消費される未開発の土地として審美化させるようになった。

住民たちはローカル土地法の目的を、審美的保護であるとすら思っている。あるインタビューは「湿地の法律は、土地の外観を守り、見晴らしの良さを確保し、建設の過剰を防ぐために重要です」と主張した。また別の者は「細分化された多くの規制は環

境に関することであるはずですが、実際には審美に関することです。環境問題があるのに街が気にしないという状況は、他の地域でみられるでしょう。人々の呼びかけや叫び次第なんです。もし隣人が呼びかけたり叫んだりしなければ、街は何があっても気にしません」と不満を漏らす。ディベロッパは言う。「水質汚染のような深刻な問題だってあるんです。開発抑制の法律もけっこうですが、ドライクリーニングの液体は取り締まらなくてはなりません」

我々が話をした、ウエストチェスター土地信託で働く女性のオフィスはベッドフォードにあり、組織のメンバーの多くも同様である。その活動は折り目正しい根本原理に則って報告されており、編集委員らはしばしば、街の保護団体や都市計画委員会と深いつながりを持つローカル新聞の、一面記事に登場している。同信託は、自然保護団体が環境の重要性を認めず受け取らないであろう土地の寄贈を、受け付けている。その女性は、ローカルな価値は特異で、時には「土地の外観」こそが主として保全すべきものになっているのだと説明した。我々は再三再四にわたって、ベッドフォードでどれだけ環境よりも審美が価値あるものとされているか、また、そのことがいかに生態管理の尺度に大きい影響を与えるかを、印象づけられた。教育を受けた、理路整然たる、公共心豊かな住民たちは、ローカルに並はずれた権力を有しており、ディベロッパが彼らに打ち克つチャンスはまずない。住民たちの環境操作の力が及ぶ限界は、環境的関心や生物多様性への科学的理解が育まれるずっと以前からある街の境界によって、広大なものとなっている。しかしその信託は、さらに広範囲の地区をカバーし、見晴らしの良い空間を、とくに土地に隣接する地域には同調させようと、可能な限り努力しているのである。

断絶の幻想

マイアナス川峡谷保護団体の監督官は、ローカル新聞の「マイアナス峡谷保護地区に 30 エーカーを寄贈した夫婦」というタイトルのインタビュー記事で、以下のように語った。「外へ出かけて月明かりの下を歩き、400 年前に今日と同じその岩を照らして

いたであろう月明かりに思いをはせる。NYC から 42 マイルの場所で、そんな月光の景色を見られるところはそう多くありません」(Patent Trader 1992, 12)。最初の一文は、人々が文明化される以前の自然に回帰したいという、啓蒙時代以来アメリカやヨーロッパで根強いロマン的な欲求を示している。植民以前の北アメリカ Precontact North America は、こうした幻想の焦点であった。第二の文は、ベッドフォードの歴史が描かれた方法と構造的には事実上同一である。ローカルな人々はしばしば、「NYC から 42 マイルの場所で」絵画として完璧な植民時代のニューイングランドの村を見られるという点を強調する。歴史的建築物と歴史的自然の両方とも、他の都市よりも多く持つべきであると住民たちが主張するところの、稀な地位財として、独占的な個人主義の枠組みの中で捉えられている。彼らが価値を置くのは、そこなのだ。最後の文の欺瞞を暴く鍵は、「NYC から 42 マイル」という言葉にある。ここで議論されるのは、高度に都市化されながら反都市的な、エリートたちが考えるような自然である。独特な価値としての平穏をもたらすのは、NYC への近接性なのだ。高度な文化、洗練と、強烈にグローバルな相互関係を伴う NYC に交通の便が良く、一方でそこから視覚的に隔離された原始の自然。都市と文化・経済的關係を持つことは、そうした諸關係から相対的に隔離された生活は文化的にも財政的にも耐え難いと考えるベッドフォードの多くの住民たちにとって、必須なのである。

結論

野性への審美的態度、その合理的でありながら反合理的な考えに基づく、複雑で多義的な歴史は、ヘゲモニー的なイデオロギーとなりつつある。そのイデオロギーは、不明瞭な、直接的かつ感覚的な、野性の中で自然化された喜びに基づくことで、神秘化されていく。それは当然他者と共有できるものであり、民主主義的帰結、そしてアメリカ精神の深奥に根付くものであるとされている。NYC のメトロポリタン地区に緑地を供給することの審美的・生態学的価値は、それが野性の保護よりも宅地開発により

強い興味を持つ者たちにとって不要であろうとも、論争の余地がないものである。野性の審美は排除と反開発の政治目的となり得るが、審美そのものは罪のないものであると考えられている。

これまで述べてきたように、景観は場所に基づく社会的アイデンティティの機能において中心的役割を演じている。ベッドフォード住民は、趣味とライフスタイルを伝達するための景観の形相の中で文化資本を流通させることによって、エリート社会的アイデンティティを実現している。景観保全の拡大は、住民の趣味と審美的感覚を反映させ続けるための厳しい管理に基づいて行われる。趣味とライフスタイルに基づくアイデンティティと、場所への審美的態度は、権力、権威、生産関係として構成される階級を、非政治化する際に、重要な役割を演じている。これは、そうした関係が空間的隔離によって曖昧にされている場合に、とりわけ有効である。目に見える経済活動が少数の古風な店舗に制限されるとき、労働の場である農場が紳士たちの馬牧場に変えられるとき、そして土地が自然保護や排他的ゾーニングや建築・税法を通じて“野性的な”状態で人工的に管理されるとき、住民は自らを、特権的な経済基盤という好ましくない事実から隔離することができる。

ベッドフォードに見出すことができるのは、場所への再埋込、すなわち親密で前近代的なコミュニティ関係に基づく審美（すなわち非現実）への称賛、グローバルな相互関係からの断絶という幻想である。Cronon (1995,81) が示唆したように、この避難所は野性の形相における自然の称賛をもたらし得る。Cronon は言う。

「我々が、文明化された産業都市の中で生活すればするほど、実生活における責任回避を自ら許し、自分の“本当の”住処は野性の中にあるのだと偽るようになる。我々は自身の一面—最も好ましいと思っている部分—を守りつつ、その紛糾からは距離を置きながら、文明の中で暮らしている」

ベッドフォードの野性は、都市の工業・金融市場によって生まれた富から、近代の経済的景観を取り除いたものとして理解できる。重要なのは、その野性が、住宅やそれに関連する教育において極めて公正を欠いた地理を含んでおり、地方税収による財政

援助というアメリカのパターンを通じて街の相対的な富に直結する性質を有していることである。審美とネガティブな地理的外部性との間の関係から生じる外部化が、環境保護を通じて広く社会に貢献するために美しい場所を創造しようとする努力、それが社会にほとんどあるいはまったく悪影響を与えないと心から信じている人々に、薄暗い影を落としていくのである。

注

- 1) 現代の日常生活の審美化における記号価値の機能については、Featherstone (1991) を参照。歴史とコミュニティの幻想としての審美化については、Jameson (1984), Harvey (1989), Boyer (1992), Featherstone (1992), Sorkin (1992), および Zukin (1992) を参照。但し、Jacobs (1998) は、審美化が政治的無関心化を促すとする様々な習慣的憶説に対し、警戒的な覚書と批評を残している。
- 2) 合衆国における、排他的ゾーニングに抗する裁判の多くは、複数世帯その他の手頃な住宅を建設したがるディベロッパーによって、法廷に持ち込まれたものである。ディベロッパーは、町の土地を買い、その後ゾーニング法と戦おうとする。ディベロッパーにインセンティブを提供する連邦綱領のほとんどが 1980 年代になくなって以来、そうした裁判事例は相対的に減少している。
- 3) Sensus communis (Kant [1790] 1987, 20).
- 4) そうした現実、すなわち相互連結性の荘厳な大罪に対して、審美的態度をとることが当然“可能”だとされている間は、これは極めて稀なことであろう。
- 5) これは我々が主としてエリートコミュニティを研究対象として選んでいるためかもしれない。社会的に抑圧されている人々の、場所に基づく経験こそが、社会的・政治的構造における批判的・革新的な見地にとってより「客観的な」根拠を示すという理論 (Hartsock 1987; Harding 1991) に拠ることもできる。一方で、ベッドフォードとその近隣でのインタビューから、少なくともこの事例に限っては、すべての階級が、審美的立場と、不平等の構造 (Duncan and Duncan 1997, 近刊) からの疎外に参加していると確信できる。場所への審美的愛着に関する反動的で革新的な両者の議論については、Jacobs (1998) 参照。
- 6) 環境保護主義者の弁明については Merchant (1995) 参照。
- 7) 余談だが、それは、眺望から簡単には消すことができず、不安を催させ—物質的富にも拘わらず—時には（精神的に）“苦しい”特権にもなり得る“階級内”の人種、宗教、エ

スニシティ, ジェンダー, そして消費様式, とくに顕著な景観デザインを通じての消費の問題として記述できる。

8) 町立図書館や歴史収蔵品はもちろん, 町立歴史博物館や自然保護団体のパンフレット, 地域の歴史的盛儀, 歴史的地区の銘板, その他にもローカル紙上の数多くの記事に至るまで, 入手可能なベッドフォードの歴史のすべて

に関する考察を基礎としている。

9) この詩 (Gurney 1979, 237) のオリジナル版において, 自然保護団体が「森林」を「庭園」と言い換えるのは, 庭園と自然保護の間に緊密な関係があることをあらためて思い出させるという意味で興味深い。

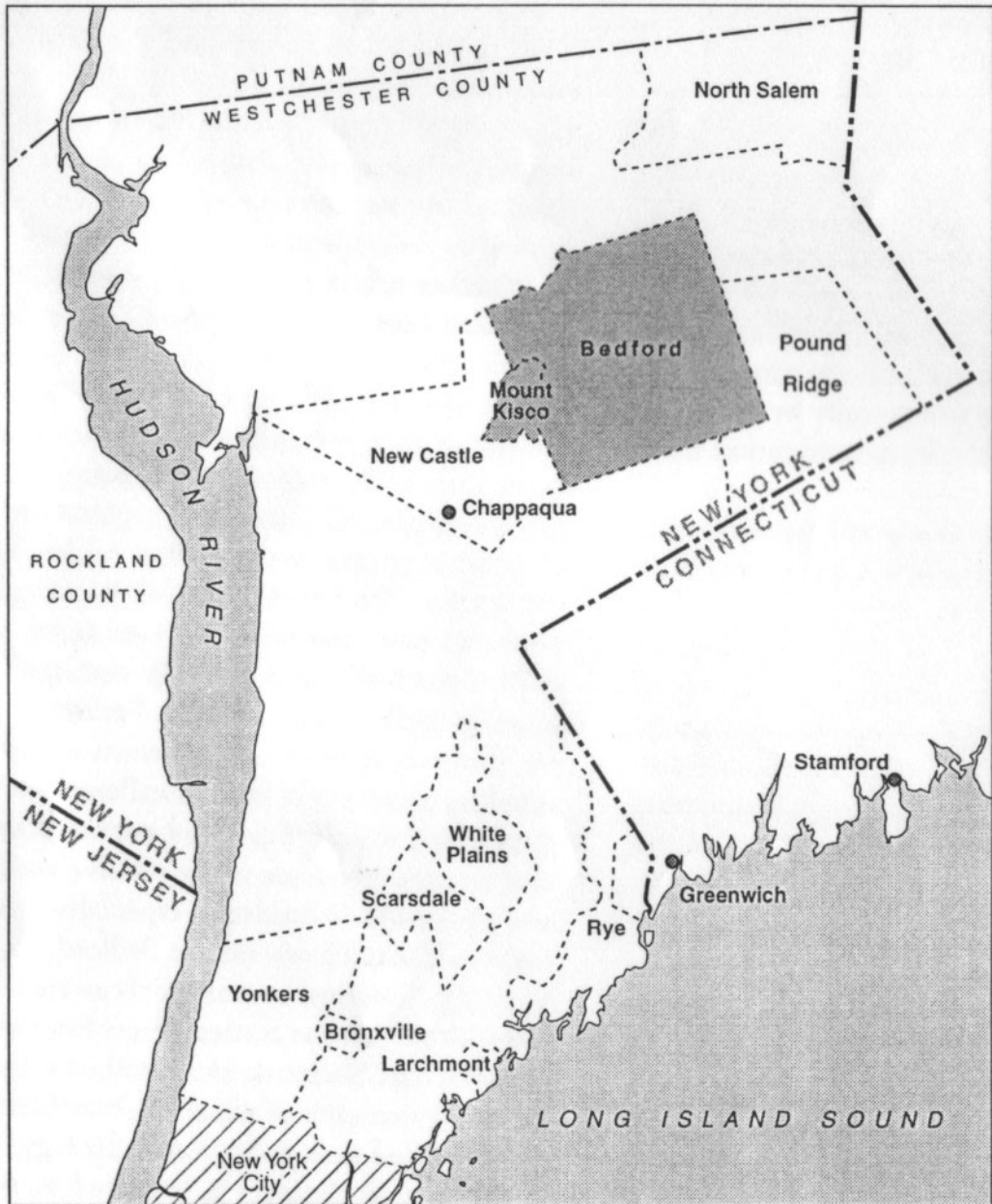


Figure 1. The Bedford region.



Figure 4. Bedford Village.



Figure 5. The symbolically important dirt roads.



Figure 6. Old stone walls in the “wilderness.”



Figure 7. A place for quiet contemplation.